

連載

刀剣の歴史と思想

第3回

酒井 利信

古代中国の宝剣伝説 太阿の剣

いよいよ読者諸賢とともに、「刀剣の歴史と思想」の扉を開け、これを探究する旅を始めようと思う。

日本の刀剣思想は、古代から現代にいたるまで途絶えることなく脈々とその歴史を重ね、世界に比類なき思想体系を作り上げてきた。しかし忘れてならないのが、刀剣は、日本に伝わる以前に、古代中国において既に単なる武器を超えて神聖視されていた。この思想が古代日本に大きな影響をあたえた、ということである。つまり、日本刀剣思想には前史があるということである。

思想的にどういった前提があったのかということ、まずもって理解する必要がある。このことが、後に日本的な思想の特徴を浮き彫りにすることにもつながるはずである。

探究の旅の出発点は、やはり、そのルーツを訪ねることから始めたい。

▼呉越の剣

中国において刀剣を神秘化するような思想が顕著にあらわれてくるのは、春秋時代の呉越地方においてである。

この時期、この地を舞台にして、特に剣

が戦場で主役を演じ、それにもなつて優秀な武器としての剣が多く作られた。これがいわゆる「呉越の剣」であり、『莊子』に「夫れ干越（呉越）の剣有る者は、匣（匣）にしてこれを藏して、敢えて用いむ也。宝とすることの至りなり」①（呉越の剣をもつものは、匣にいられてこれを用いず、





宝とした）、と記されるほど重宝された。まず、これらは武器として優れていた。その後、その優秀性ゆえに、これを神秘化する思考が生じ、多くの宝剣伝説が語られるようになる。ここに刀剣思想のルーツがあると考えてよい。

中国において宝剣として語り継がれてき

ているものはいくつかあるが、有名なものの一つとして太阿たいあをあげることができる。『史記』や『晋書』など諸書に引かれる、中国を代表する名剣である。刀剣の思想と歴史を考えるオープニングにおいて、まずこの太阿に注目してみたい。

太阿は、『史記』において「陸には牛馬を断ち、水には鵠鴈を裁り、敵に当れば堅甲鉄幕を斬る」②（陸にあつては牛馬も真つ二つにし、水にあつては鵠や鴈を斬り、敵に当れば鉄のよろいもたたき斬る）と記されている③。この剣は、まず、武器として他の迫随を許さないほど優れたものとして認識されていたと考えてよいだろう。それが神秘化されて語られていく。

呉越の劍に関する宝劍伝説は、『越絶書』や『呉越春秋』に記されているが、特に太阿については『越絶書』に重要な記述がみられる。『越絶書』は、歴史と小説の間に位置づけられるもので、後漢の袁康・呉平えんこう ごへいが著したといわれている。春秋時代の呉越の存亡から後漢にいたるまでの歴史を記し、越の国を中心に記述していることから『越絶書』と名づけられたといわれる。内

太阿の伝説

容的には、史実としての信憑性しんぴやうせいに疑問を抱かざるを得ない部分もあるが、太阿を語る上で欠くことのできない史料であることは確かである。この文献からは、歴史的事実を確認するというよりはむしろ、太阿に焦点をあてることにより当時の刀剣に対する思想を読み取ることに集中したいと思う。

いよいよ中国刀剣思想の先駆けとして、
太阿の伝説をみていきたい。

『越絶書』によれば、劍の鑑定士である風胡子ふうこしという人物が、楚の王の命令で呉の国に赴いて、欧冶子おうやしと干将かんしょうに鉄劍を作るように依頼する。この二人は、「呉に干将あり、越に欧冶子あり」といわれるほど、作劍に関しては優れた技術をもつことで有名であった。当時ここには、優れた劍工が存在し、劍の鑑定士までいたということである。呉や越、そして楚といった国々において、いかに劍の文化が発達していたかがう



優れた剣には固有名詞がつく

かがわれる。

欧冶子と干将の二人は、茨山の鉄をとって、龍淵・泰阿（太阿）・工夫という三振の剣を完成させ、風胡子はこの三剣の出来ばえを讃えたという（テキストによって、「太阿」と記す場合と「泰阿」とする場合がある。ここでは原典①に忠実に「泰阿」と記しておきたい②）。

以後この続きを、原文の書下しを示しつつ、その内容を現代語で確認しながら追ってみたい。

晋の鄭王聞きてこれを求むるも、得ず。師を興して楚の城を囲み、三年解かず。倉には穀粟索き、庫には兵革無し。左右の群臣・賢士、能く禁止するもの莫し。

晋の鄭王は噂を聞きつけて宝剑を求めたけれども、手に入らなかったたので、軍隊をおこして楚の都城を包囲し、三年もの間撤兵しなかった。城内の穀物蔵には食料がつきてしまい、武器庫には武器やよろいがなくなってしまう。楚王側近の家臣や賢士たちで、事態を打開できるものは誰もいなかった。以上のような内容である。

晋の王は、宝剑を得たいがために城攻めまで行なったということである。しかも三年も撤兵しないという執拗さであり、尋常ではない。楚王にしてみれば、食料も武器もなくなり万策尽きた絶体絶命の状態といえる。しかし事態は次のように進む。

是に於て楚王これを聞き、泰阿の剣を引き、城に登りてこれを麾る。三軍破れ敗れ

て、士卒迷惑し、流血千里、猛獸欧瞻し、江水折揚して、晋鄭の頭畢く白し。

楚王はこの事態を聞き知って、泰阿（太阿）の剣を手を持ち、城楼に登ってみずから軍を指揮した。晋の大軍は壊滅的な敗北をして、兵隊はみな精神が混乱し、流血は千里に及び、猛獸さえも驚き恐れ、長江の水さえも還流して広がり、そのため晋の鄭王の頭髮は真っ白になった、というものである。

楚王は、この泰阿（太阿）の剣をもって起死回生の大逆転を演じたというのである。

ここで注目すべきは、王はこの宝剑をもって、超人的に敵を斬りつくして大勝利を得たのではないということである。城楼に



越王句踐の剣
（コリンヌ・ドゥペーヌ＝フランクフォール著『古代中国文明』
創元社、1999年より）



宝剣の威力
or
使用者の超能力 ?

マジカルな描写

刀剣の歴史と思想

第3回「古代中国の宝剣伝説 太阿の剣」

登ってこれを振って指揮したにすぎないにもかかわらず、敵は壊滅したという、非常にマジカルな描写である。

もう一点、こういった宝剣伝説を読むにあたって、常に頭の中をよぎるのが、こういった奇跡的な現象を引き起こしたのは、宝剣の威力によるものなのか、それともこれを使った者のもつ超能力によるものなのかという問題である。宝剣が力を発揮したとなれば、他の王がこれを使っても同じ結果であったということであり、持ち主の力であれば他の剣をもつても敵は倒せたということになる。この類の宝剣伝説は他にもあるが、この問題については、通常ストレートに文中に書かれていることはまずなく、また、行間から答えを読み込むこともなかなか難しい。しかし、ここではこの問題に明確に答える。

楚王是に於て大いに悦び、曰く、「此れ剣の威なるか、寡人の力なるか」と。風胡子対えて曰く、「剣の威なるも、大王の神に因る」と。

楚王は大いに喜び、「これは宝剣の神威なのだろうか。それとも私の勇力なのだろうか」と問うた。風胡子は、「宝剣の神威によるものです。しかし大王様の神勇があつてのことです」と答えた、というものである。

風胡子は、王に氣を使いながらも、はっきりと宝剣の神威によるものだと言いつけている。王が超人的な力を発揮したのではない。あくまでも宝剣のもつ神威によって、この難局を切り抜けたということである。

この時点で泰阿は、高度に神秘化され、通常の武器としての機能の範囲を遥かに超えて描かれている。そしてこの名剣の威力を、『越絶書』は「剣の威」と記述している。

▼ 剣の威の説明

この『越絶書』に書かれている太阿（泰阿）の宝剣伝説は実に面白い。

こういった宝剣伝説に触れるたび、ふと我にかえって思うことは、なぜ単なる金属

器の武器がかくも神聖なものとして語られているのかということである。つまり剣の神威の根拠はどこにあるのかということである。日本の刀剣思想の場合には、これがわかりにくいことが多い。それこそ文献の行間を読むことで、どうにか把握していかなくてはならないことがほとんどである。しかし、中国の刀剣思想の場合、比較的ストレートに文献に記述されている場合がある。『越絶書』は、このことについて実に明快に答えてくれている。しかも中国刀剣思想のいたって原初的な認識が描かれているという点で、非常に面白い。

楚王曰く、「夫れ剣は、鉄のみ。固より能く精神の此の若き有るか」と。

楚王は、「そもそも剣はただ鉄で作ったものだ。そのような鉄にもともとこのような神威があり得るのだろうか」と問うた。

まず、王の質問という形で、この問題に対して、非常にストリートな問いを立てている。これに対して風胡子が答える形で、「時各然らしむる有り」（時代がそれぞれ





後漢の袁康・吳平が著したといわれている『越絶書』
（『越絶書』四部叢刊本、商務印書館より）

れそうさせるのです）

と明確に述べている。この一句に尽きるの
であるが、これではまだ分かりにくいこと
は確かであり、具体的に次のように補足し
ている。

黄帝の時に至りては、玉を以て兵を為り、
伐りし樹木を以て宮室を為り、——中略——

夫れ玉も亦神物なり。——中略——禹穴之
時、銅を以て兵を為り、以て伊闕を鑿ち、
竜門を通じ、江を決して河を導き、東のか
た東海に注がしむ。——中略——此の時に
当たりては、鉄兵を作り、威もて三軍を服
せしむ。天下これを聞き、敢えて服せざる
もの莫し。此れも亦鉄兵の神なるも、大聖
徳有ればなり。

この一文は、以下のような内容である。
黄帝の時代になると、美石を用いて武器を
作り、伐採した樹木で宮室を造営した。そ
もそも美石もやはり神威の物である。禹王
の時代には、銅を用いて武器を作っていた。
そして銅製の工具で伊水を開鑿し、竜門に
水を通わせ、長江・黄河の水を導いて、東
方の東海に注ぐようにさせた。今のこの時
代では、鉄を材料とする武器を作り、その
威力で大軍をおどし支配下に置く。天下の
人々はそのことを聞くと、服従しないとい
うような勇氣のあるものは誰もいない。こ
れもやはり、大王が聖徳を具えていること
を物語るものでもあるが、鉄製の武器の持
つ神威にほかならない。

結局、石器の時代、銅器の時代、鉄器の
時代という、文明が進歩していくなかで、
その時代その時代の最先端文明であるから
こそ神威があるという理屈である。それゆ
え、石器時代にあつては美石もやはり神威
があつた。現在は鉄器文明の時代であるか
ら、何ものをも屈服させるだけの神威が、
最先端文明の産物である鉄器の剣にはある
ということである。

「時各然らしむる有り」（時代がそれぞれ
そうさせるのだ）というのは、こういった
意味である。

『越絶書』は、何も難しいことは言わない。
誰も斬らず、剣を振り自軍を指揮しただけ
で敵を壊滅させるといふ神秘的な描写につ
づいて述べられた宝剣の神威についての説
明は、いたってシンプルであつた。あくま
でも剣の武器としての実用性が優れていた
ことから発した神秘性であるため、こうい
った説明になるのだろう。

ここには、剣を神聖視するようになる、
ごく初期の観念がうかがわれる。いまだ従
来の中国的な思想の関与は何もない。

この出発点において、これがたまたま片



刃の刀ではなく諸刃の剣であつたことも、刀剣の歴史と思想にとつては重要なことである。

全註

(1) 『莊子』刻意編

(2) 『史記』蘇秦列伝

(3) 太阿の名剣は、中国のみならず日本においても知られる。例えば、近世初期の著名な禅僧である沢庵宗彭は、その著『太阿記』のなかで「太阿は天下に比類なき名剣の名なり。是の名剣は、金鉄の剛きより、玉石の堅きまで、自由に研れて天下に刃障になる物なし」(太阿は天

下に比類なき名剣の名で、これは金や鉄のような剛いものから、玉や石といった堅いものまで自由に切れて、天下にこの刃をはばむものはない」と記している。

(4) 『越絶書』四部叢刊本、商務印書館

(5) この剣に関して「太阿」と「泰阿」という二つの表記があり、このことをどう考えるかという問題がある。

中国には、類書といわれるものがある。類書というのは、どの書物にどういった記述がなされているかということを網羅的に扱い、これを項目別に分類し、まとめたものである。「剣」であれば、これに関する記述をその出典とともに、例え

ば「越絶書に曰く、…」という形で、多く集めてまとめている。日本の『古事類苑』と似ている。『北堂書鈔』や『太平御覧』『芸文類聚』といった類書では、同じ『越絶書』から同一の文章を引用してきているが、この剣名についてだけ「太阿」とする場合と「泰阿」と記す場合がある。

つまり、別の剣が二つ存在するというのではなく、テキストによって表記が異なるだけで、同一の剣を指すと考えてよい。

一般的には「太阿」とすることが多いようである。

1/3広告

